Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

アンティークで自然感覚あふれる空間

青梅市立総合病院（東京都青梅市）

アンティークな雰囲気の正面玄関ロビー

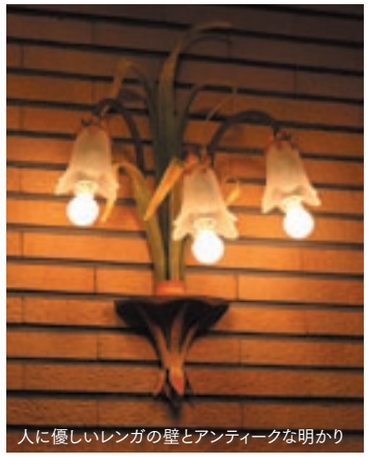
東京都の多摩地域西部に位置する青梅市。同市の中でも、JR青梅線河辺駅周辺は人口が増加している。同駅から徒歩約5分、多摩川と奥多摩の山々を望む青梅市立総合病院も少しずつ増築し、現在は西棟、東棟、南棟、南別館、新棟からなる。

しかし、この病院に入ってみても、建設時期の異なることによる不統一感は感じられない。レンガの壁、アンティークな明かり、自然をモチーフにしたフィルムアートやオブジェが内装のベースとなっているからだ。

正面玄関のロビーはレンガの壁に囲まれ、シャンデリアが落ち着いた光を放っている。小さな花屋と喫茶店、自動診療受付機が並び、自動診療受付機の前に立つ係員が患者に丁寧な対応をしている。

PET・RIセンターにつながる廊下には、患者の不安を和らげるため、白樺の森のクロスが張ってある。市花が梅であることから、検査室の壁には地元の吉野梅林、検査機本体にも梅のフィルムアートが張ってある徹底ぶり。売店前の廊下の壁にも梅を洋風にデザインしたステンドグラスがはめ込まれている。

木々や動物のオブジェに囲まれた「くまさんの森」



人に優しいレンガの壁とアンティークな明かり

梅をあしらったステンドグラス

母乳が出やすいように森の雰囲気を演出した授乳室

だまし絵手法を使って
地中海風を演出している婦人科外来前

検査室は壁も検査機も“梅づくし”

2階の婦人科外来の入り口前には驚かされる。「だまし絵」のように壁全体に風景写真を張り、その前にいすとテーブルを並べている。入り口外周などに人造石をあしらい、城の門のように見せ掛けている。あたかも地中海にいるかのようだ。

3階の授乳室の内装は母乳が出やすいといわれる緑色を基調にし、壁には森林のフィルムアートが張ってある。こちらも、森の中で赤ちゃんに授乳しているような錯覚に陥るという。

小児科入院患者のためのプレールーム「くまさんの森」も、自然の生命力にあやかろうと森や動物のオブジェを配置したつくりに。小児科病棟には、アメリカのヒーリングアーティストのジョン・イアマテオ氏が制作した魚や海鳥などのイラストやオブジェが広がる。

屋上庭園「癒しの小径」は入院患者の歩行訓練にも利用できるよう、倒れてもけがをしにくいようにウッドチップで舗装。花壇では四季折々の草花を楽しめる。

市立病院でありながら、なぜここまで手を入れることができたのか。それは、癒しと安らぎの環境づくりに全職員が一丸となって取り組んできた結果だという。

開放性が院内貫く「ヘルシーホスピタル」

帝京大学医学部附属病院（東京都板橋区）

エントランスにはフレスコ・モザイク画家・宮内淳吉氏の作品。
絵は左から生命の誕生の場面を描いて喜びを、中央は太陽と銀河を描き永遠を、右が治癒の場面を描き希望を表現した三部作

東京北部郊外に延びるJR埼京線の十条駅。下町の匂いが残る街並みを下ると、いつしか景色は文教地区の色を帯び始める。視線を上に向けると、地上19階・地下2階の真新しい病院が目に飛び込んでくる。2009年5月にグランドオープンした帝京大学医学部附属病院だ。

「旧病院を一気に全部壊して、新病院に移る。大学病院規模でこうした例は極めて珍しいはずです」

そう語るのは経営企画室の稲垣宏治課長。移転プロジェクトを進めてきたチームの中枢にいた一人だ。チームはその後、現在の経営企画室に移行した。

第1期の新病院建設に続き、現在は第2期工事が続いている。旧病院跡地に帝京大学の医薬系学部が入る大学棟を建設中。12年4月に開校の予定だ。

「最終的には外構整備を行い、キャンパス全体を一つの都市に見立てていくのが将来像です」（同前）

新病院の建設が決まったのは04年4月。病院全職種を加えた60人程度のプロジェクトチームが発足。意見の交換やシミュレーションを何度も繰り返し、計画を進めてきた。職員の意識も変化していく。

「計画をみんなでやり遂げたことで横のつながりができた。ユニフォームや制服も一新。チームとしての自覚も生まれました」（同室・矢口成美係長）

「コミュニケーションの促進」を重視する冲永佳史理事長の意思は広く共有されている。院内のあちこちでスタッフが声を掛け合っていた。「ヘルシーホスピタル」の片鱗はこんなところにもうかがえる。

新病院の大きな特徴の一つが開放性。地域に開かれた病院を具現化している。1階の病院と建設中の大学棟の間には幅8m、距離200mのコミュニティーストリートが東西に貫通している。銀行やコンビニ、レストラン、カフェが入店。大学棟が竣工すれば、合わせて16㍍幅に拡張される予定。

6階にもレストランや美容室が並ぶ空間を用意。入院患者が1階まで降りなくても、パジャマのままいられるスペースとして考案されたものだ。

新病院のもう一つの特徴は「共同医局」と「スタッフエリア」。助教以下の医師はスタッフエリアで診療科の壁を超えたコミュニケーションを図っている。

病院の北西部には石神井川が流れている。河岸に立ち並ぶ桜の木々は帝京大板橋キャンパスの象徴でもある。2～3階の外来廊下の天井まである大きなガラス窓「カーテンウォール」は廊下に沿って婉曲しており、春先の眺望はまさに絶景そのもの。

最上階にある個室。部屋ごとのセキュリティーシステムとシックな色調、高層からの眺望が特徴。

個室のトイレは、ユニットシャワーの水がかからないようメーカーとともに何度も試作を重ね、段差をつけないように扉を設置した

「キッズガーデン」と呼ばれる中庭を臨む小児科。
柔らかな色調の木枠が使われている。

小児科の壁や天井、ニッチ（棚）にはアーティスト・若野忍氏の作品。

2～3階の外来ホール吹き抜け。オランダのアーティスト、
ルネ・リートマイヤー氏の作品

4月ごろの病院。桜の花がよく似合う